

平城京左京一条三坊出土のガラス小玉鑄型

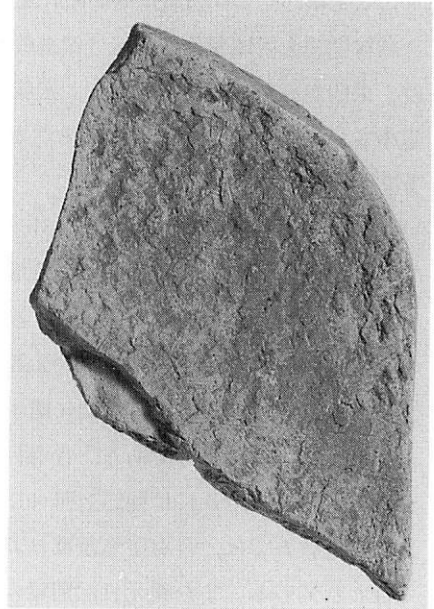
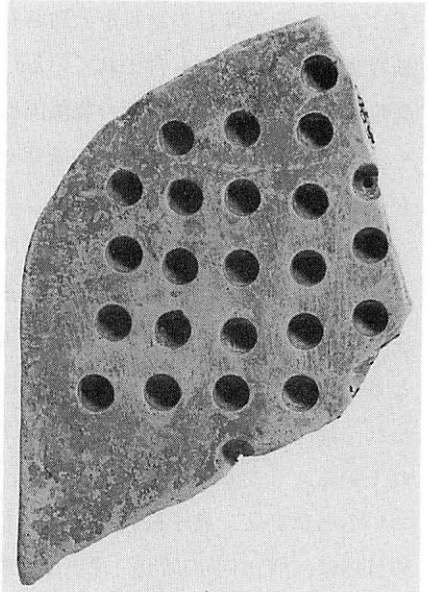
平城宮跡発掘調査部

平城京左京一条三坊十五・十六坪の溝 SD485から、1969年の調査でガラス小玉の鑄型が出土していた。当時は類例もなく、不明土製品として報告書（『平城宮発掘調査報告』VI）の記載からも漏れていたが、飛鳥藤原宮跡発掘調査部による1991年の飛鳥池の調査など、最近の調査の進展によりガラス小玉の鑄型であると判明したので、ここに改めて報告する。

鑄型は、厚さ0.7～0.9cm、残存長7.6cm、残存幅5.2cmを測る。土師質の胎土で、2枚の粘土板を貼り合わせており、断面の一部に剝離面がある。一面を丁寧になで調整で仕上げ、径5mmの半球形のくぼみが25個残る。くぼみの中央には小玉の紐通し穴の心棒を立てる径1mm弱の穴があるが、反対面までは貫通しない。もう一面には格子目叩き状の圧痕があり、その上を軽くなでている。側面は、削りによって面を作る。二次焼成による赤変は見られず、ガラスも付着していない。

左京一条三坊十五・十六坪は、奈良時代当初は二町が一体となった、園地を有する宅地であり、長屋王の作室宮の候補地と考えられていた地である。SD485は平城宮土器Ⅱの時期の溝で、他に工房関連遺跡の存在を示すような遺物は出土していないが、周辺に小規模な工房が存在していた可能性はあろう。

山内紀嗣「ガラス玉の鑄型」『天理参考館報』第4号 天理大学付属天理参考館 1991 (玉田芳英)



ガラス小玉鑄型（実測図1:2，写真1:1）

